
牡丹

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

牡丹

【Nコード】

N5964C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

後漢末期。貂蝉は義父王充を助ける為に自ら犠牲となって董卓と呂布を惑わす。だがそれは悲しい犠牲だった。三角関係の純愛、悲恋です。

第一章

牡丹

中国後漢の末期の話である。この時代の中国は大いに乱れていた。黄布賊からの兵乱はやがて群雄割拠の状態となり天下はどうなるかわからない有様であった。その中で都を制圧したのが董卓という男であった。

字を仲穎という。とてつもない大男でありその力は素手で牛を倒せる程であった。しかも両利きであり左右交互に弓を放つことができた。彼は北の異民族の血を引いていて馬を操ることもそれを使った戦いも得意であった。

親分肌の人物であり部下には気前のいい男であった。だが同時に強欲で敵に対しては残忍であり目的の為に手段を選ばない。肥満した身体に濃い髭、彫のある顔には燃え上がるような二つの目があった。よく言えば豪壮な、悪く言えば粗野な、そうした男であった。簡単に言うくと漢民族とはまた別の考えの男であった。

彼は都洛陽に入るとそのまま権力を掌握し若い皇帝を廃して新たな皇帝を立てた。そこからさらに先の皇帝や自らに反対する者を次々と粛清して実質的に漢王朝を乗っ取ってしまった。彼の横には様子である呂布がおり、また彼自身の力もあり誰も逆らうことはできなかつた。

この呂布という男もまた厄介な存在であった。字を奉先といい西方の生まれであった。その身体はやはり大きく力も技も他の者の追随を許さなかつた。その顔は西方の血か彫が深く端整であった。吊り上った眉は雄々しくまるで鬼神のようであった。猛々しい美貌であった。

牡丹

馬も弓も人の技を遙かに越え力は董卓さえ凌いでいた。とりわけ得意としていたのが方天画戟であり槍の片方に三日月形の刃があるこの武器を自由自在に操ってみせた。そうした男であった。

その彼が董卓の横にいる限りは誰も何もできはしなかった。董卓は彼を養子としており絆も深い。そんな彼等を見て人々はただ溜息をつくだけであった。

多くの者は彼等の専横と横暴に嫌気がさし朝廷を去っていった。その中で僅かに残り皇帝に忠誠を誓う者達は董卓の顔色を伺いながらも彼を取り除こうと考えていた。しかしそれは到底為し得るものではなく誰もが溜息をつくばかりであった。

司徒にあつた王允もまたその一人であつた。彼はある夜自分の屋敷において一人溜息をついていた。

自分の部屋の窓から夜空を見ている。杯を手にとただただ溜息をつくばかりである。

「もし」

そこに一人の美しい女が入ってきた。身体は細く触れば折れそうである。黒い髪は長く絹のようである。その切れ長の目は流麗でありその奥に静かな黒い光をたたえている。顔は細くそれでいてまるで絵のように整っている。肌は白くきめ細かい。唇は小さく紅の色をしている。白と桃の柔らかい服に身を包んだその女が一人部屋で溜息をつく王允に気付いて彼に声をかけてきたのだ。

「どうされたのですか？」

「貂蝉か」

「はい」

この女の名を任紅昌という。貂蝉は字だ。王允の養女であり彼は本来名前で呼んでもいいのであるがあえて字で呼んでいるのである。孤児であつた彼女を引き取り育ててきた。今ではその美貌と機知、芸への才能で彼の自慢の娘となっているのである。その彼女がやって来たのだ。

「お悩みのようですが」

「何も無いと言えは嘘になる」

王允は娘に顔を向けて答えてきた。

「わしの悩みは他でもない」

「やはりお悩みでしたか」

「この歳になるまで漢にお仕えしてきた」

彼は溜息をつくのを止めて答える。

「しかし。今は」

「相国様のことですね」

「うむ」

董卓のことである。彼はこの位にいて専横を極めている。言うならば国の宰相であり皇帝に匹敵する権限を彼は持っていたのだ。それもまた彼の横暴を支えるものであった。

「このまま専横が続けばどうなるのか。わしはそれが心配でならんのだ」

「相国様が身を慎まれることは」

「有り得ぬ」

首を横に振って述べる。暗い部屋の中でその首が幾つかに見えた。

「間違つてもな。それにどうにかしようにも」

「無理なのですか」

「到底無理じゃ。相国の力はあまりにも強い」

腕もたつ。伊達に長い間戦場に生きてきたわけではない。肥満してしまつたがそれでも董卓の力も技も卓越したものであり既に刺客をその手で幾人も倒している。また用心深い性格であり服の下に鎧を着込んでもあるのだ。食事の毒見役も幾人もいる。

「しかも。その隣には」

「中郎将様ですか」

「そうじゃ」

呂布のことである。

「あの男には誰も勝てぬ。あの男がいる限りはどうしようもないのじゃ」

「そんなにですか」

「董卓はあの男を常に側に置き養子とすらしている。あの男だけは どうしようもない」

「それでは義父様」
「何じゃ」

娘の言葉に顔を向けてきた。

「相国様をどうにかできるのは中郎将様だけですね」

「そうじゃな」

その言葉に頷く。

「では御二人の仲を裂かれてはどうでしょうか」

「二人を争わせるというのか」

「はい」

貂蝉は答える。答えながら父の顔を見る。

「如何でしょうか」

「それはよいかも知れぬな」

王允はその言葉に思うものがあつた。彼等、特に董卓は強欲な男だ。それを使えばどうかなるかと思つたのだ。

「しかしじゃ」

彼はここで言う。

「そう易々とは。わしの持っている宝でもどうにかなるとは」

「では女性ではどうでしょうか」

貂蝉は言つてきた。

「宜しければ私が」

「何っ」

王允はその言葉に息を呑む。娘の美しさは知っている。しかし。

彼女を差し出すのは義理とはいえ親として耐えられぬことであつた。

彼は非情な男ではない。それはできなかつた。

「しかしそれは」

「義父様」

貂蝉はここで言葉を強くさせる。

「御心配には及びません。これまでの御恩を思えば」

「いや、ならん」

娘の言葉を退ける。

「それだけはならんぞ」

「ではこうしましょう」

それを聞いた貂蝉は父に言ってきた。顔を窓の方へやる。

「庭に牡丹がありますね。その牡丹の花を持って来ましょう」

「牡丹でどうするのじゃ？」

「花びらが白ならば私は義父様の仰る通りにします。ですが赤ならば」

「行くのじゃな」

「そうです」

彼女は答える。

「それで如何でしょうか」

「うむ、わかった」

王允はそれを聞いて聞き入れてくれたかと思った。彼の家にある牡丹は白いものしかないからだ。

「それではな」

「はい。では」

父に応えて一旦部屋を後にする。王允は娘のその姿を見て内心胸を撫で下ろしていた。これで彼女の早まった気持ちを抑えられたのだと思ったからだ。しかしそれは甘い見通しであった。

第二章

暫くして戻ってきた。その手にあるのは。赤い花びらだった。

「馬鹿な、何故赤が」

「宜しいでしょうか」

赤い牡丹の花びらを見せて父に問う。

「これで」

「……よいのじゃな」

項垂れた顔と声で娘に問う。

「それで」

「はい。覚悟はできております」

強い言葉を返してきた。

「ですから」

「わかった」

そこまで言われて遂に彼も頷いた。

「では任せる。好きなようにいたせ」

「有り難うございます」

貂蝉は父に礼を述べる。だがこの時彼女の腕には傷があった。そこには赤い血が流れている。彼女はその血で白い牡丹の花を赤く染めていたのである。しかしそれはあえて言いはしなかったのだ。

それからすぐに。王允は呂布を自分の屋敷に呼んだ。美味しい酒があると聞いた呂布はすぐにやって来た。

「やあ、王允殿」

一際大きな男が屋敷の中で彼に声をかける。その大きな男こそ呂布であった。礼服に身を包んでいるがそれも実によく似合っていた。

「よくぞ招いて下さった」

「いやいや、こちらこそ」

王允は笑って呂布に応える。二人は屋敷の廊下で言葉を交える。

左右にはそれぞれの下僕達があり廊下の左右は赤く飾られている。廊下とはいってもかなりみらびやかであった。

「天下に名高い呂將軍をお招き頂けるとは」

「ははは、お世辞は結構」

呂布は案外単純な男だ。ありきたりの世辞にも気をよくさせている。

「まあお喋りはその位にして」

「はい、こちらへ」

王充に案内されて奥へと入る。奥に入るともう宴の用意ができていた。王充と呂布の席は上座に用意されていた。二人がそこに着くとすぐに音楽が奏でられ羊の肉が出された。

「羊とはこれまた」

「將軍がお好きと聞きましたので」

「ええ、確かに」

呂布は杯を手にそれに応える。彼は元々西方の生まれだったので羊は馴染みの肉だったのである。だからこそこれを出されて機嫌をよくしない筈がなかったのだ。

「ささ、どうぞ」

「かたじけない。しかし」

「しかし？」

「この曲はまた独特の曲ですな」

耳に聴こえる演奏を耳にして述べる。

「それがしは曲というものには疎いのですがこれはまた」

「娘が作ったものです」

「娘が」

呂布はその言葉に顔を向ける。

「王充殿に娘がおられたのですか」

「御存知ありませんでしたか」

「いや、全く」

呂布は驚いた顔でそれに応える。

「聞いてはおりませんでした」

「義理の娘なのですが」

「左様ですか」

「はい。それでは」

王充はまた述べる。

「宜しいですか？今こちらに呼んでも」

「ええ」

彼は別に断る理由もなかったのでそれに頷いた。

「それでは御願ひ致す」

「わかりました。それでは」

卓の上にある鈴を鳴らす。すると紅と白の華やかな服に身を包んだ一人の女が姿を現わした。それは貂蝉であった。

「何と」

「貂蝉」

王充は息を呑む呂布をちらりと見た後で彼女に声をかけてきた。見れば彼女は二人の前に膝をついて畏まっている。

「こちらはあの呂布將軍じゃ」

「その方がですか」

「そうじゃ。御主の舞、見せてやるのじゃ」

「わかりました」

貂蝉はその言葉に頷く。彼女が作ったという曲に合わせて優雅に舞をはじめた。その舞は艶やかでもあり呂布の心を虜にするには充分であった。

王充はそんな彼を見て俯いていた。そこには躊躇いの色があった。しかし貂蝉は優雅に笑っている。それはまるで一つの障害を越えたかのようにであった。

舞が終わりまた畏まる。王充はそこで呂布に声をかける。見れば彼は貂蝉を見てまだ呆然としていた。

「將軍」

「はい」

王充に言われてようやく我に返ったといった感じであった。

「如何でしょうか。娘の舞は」

「いや、これは」

それに応えて述べる。

「これ程の舞は見たことがござらぬ。いや、何と言っていていいか」

「將軍、そこまで」

貂蝉は呂布の言葉を聞いて頬を赤らめさせる。それが呂布の心をさらに捉えるのであった。

「王充殿」

呂布は貂蝉を見たまま王充に声をかけてきた。

「御息女の御名前は何とこのかな」

「貂蝉と申します」

「貂蝉か。よい御名前ですな」

「有り難うございます」

「若し宜しければ」

呂布はまた述べる。

「またお伺いしても宜しいでしょうか。そしてまた」

「いやいや、それには及びませぬ」

王充はにこやかに笑って呂布に言ってきた。そのにこやかな顔は仮面でありその裏にある真の顔は。貂蝉を見て泣いていた。

「娘は十六になりました」

「うむ」

「そろそろ相手を探していたのですが。それが天下にその名を知られた呂布將軍であれば」

「よいというのか？」

「はい」

真意を押し殺して答える。

「如何でしょうか」

「いや、それは」

呂布は思いがけないその言葉に目をしばたかせて王充を見る。こ

れは予想していなかったのだ。

「まことでござるか」

「嘘で申しましょうか。御覧下さい」

貂蝉を手で指し示してみせる。

「娘もまた」

見れば呂布を見て顔を赤らめさせたままであった。彼はそれを見て王充に顔を戻してきた。

「それでは」

「はい。吉日を選んで」

こうして貂蝉は呂布の妻となることが決まった。呂布にとってはまさに奇貨であった。しかし貂蝉にとってはそうではなかった。彼はそれに気付いてはいなかった。

第三章

数日後王充は今度は董卓の前に参上した。呂布が練兵に出ているのを見計らった上である。彼はその時政務を執っていた。一人であるが部屋には彼の存在でそうした寂寥は感じられなかった。広い部屋だというのに彼の気で満ちている。そこで書簡を見ていたのである。部屋の前にいる武装した兵士達に息を飲んだ後で部屋に入っていた。

「太師」

「ふむ、司徒殿か」

王充が相手では董卓も無礼ではいられなかった。その猛々しい顔と目を彼に向けて応える。それは宮中よりも戦場にあるべきものであった。髭も髪も濃く身体も異様なまでに大きい。威圧感は相当なものであった。

「何用かな」

身体と同じく強く大きな声で彼に問う。

「実は太師を宴にお招きしたいのですが」

「わしをか」

「はい。如何でしょうか」

「司徒殿の誘いだ。断るわけにもいくまい」

微かに笑って述べる。その髭が動いた。

「それでは」

「うむ」

董卓は応える。

「是非ともな」

こうして彼も王充の家に招かれることとなった。護衛の兵士達を引き連れ物々しくやって来た。人々はその彼と兵士達の姿を見て怯えるばかりであった。彼は都においては恐るべき暴君であったのだ。屋敷に入ると奥の間に招かれた。そこは呂布も招かれた部屋であ

る。王充はそこに入る前にそつと貂蝉のところに来て問うのであつた。

「よいのだな」

「はい」

貂蝉はその雪のような顔をそのままにしてこくりと頷く。

「では呼ばれましたら」

「なあ」

ここで彼は娘に声をかける。

「今ならまだ間に合うのだぞ。だから」

「義父様」

彼女は止めようとする父に対してあの牡丹の花を見せてきた。赤い牡丹を。

「おわかりですね」

「止まらぬか」

「はい、牡丹が決めたことです」

彼女は述べる。

「ですから」

「わかった」

娘の決意が固いことが。もう何も言えなかった。

「それではな」

「ええ」

彼女はそのまま着替えに姿を消した。暫く王充と董卓だけの宴であつたが貂蝉が姿を現わす。そしてまた舞を舞うのであつた。

それを見て董卓も心を奪われる。王充はそれを見て心の中で苦い顔をする。しかしそれを隠して舞が終わった後で董卓に顔を向けるのであつた。見れば彼もまた呆然としていた。

「太師」

「う、うむ」

牡丹
董卓は何とか威厳を保って彼に応える。しかしその目は完全に彼女にあつた。

「如何でしょうか、娘の舞は」

「いや、これは」

王允に承えて述べる。

「これ程のものは見たことがない」

「また御冗談を」

「冗談などではない」

董卓は少しムキになってまでそれを否定してきた。そのうえで述べる。

「美しさもな。ここまでは」

（左様ですか」

「司徒殿」

王允に声をかけてきた。

「あの者は貴殿の家の者であるか」

「はい、娘です」

「何つ、娘だと。確か御主には」

「ええ。義理でございます」

王允に娘はいないのは知っていた。だからこそ問うたのであるがそれから答えが出た。

「義理でるか」

「御気に召されたでしょうか」

「召されたところではない」

まだ貂蝉を見ていた。そのキラキラとした目が彼女に向けられている。

王允はその目に心を暗くさせる。しかし彼女の決意は変わらない。じつとその流麗な目に計りを含ませて彼を見ていた。こうなっては彼も観念するしかなかった。だからこそ言った。

「太師。宜しければですな」

「うむ」

「御側に置かれては如何でしょう」

「よいのか」

好色、しかも並外れてのものであると言われている董卓はその言葉に息を呑む。それから問うが王充の返事は変わりはしなかった。

「勿論です。後は太師の御心次第です」

「うむ、わかった」

彼はその言葉に頷いた。義理とはいえ父親が言うのではもう問題はない。彼は決断を下した。

「それでは。譲り受けさせてもらおう」

「はい」

こうして董卓は貂蝉を貰い受けてすぐに自身の宮殿に連れ帰った。それから暫く家から出ず彼が新しい美女を手に入れたことが忽ちのうちに噂になった。そのことは呂布の耳にも入った。

「のう李儒殿」

彼はこの時李儒と共にいた。董卓の娘婿であり参謀でもある。彼もまた董卓にとってなくてはならない人物である。薄い髭を生やした痩せた小男であった。全体として狡賢そうな印象を受ける。彼等は今杯を手呂布の屋敷で話をしていた。

廊下に席を設けそこから庭を見ている。呂布はそもそも西方の生まれであり都の贅沢といったものへの知識は乏しい。従ってその庭も質素なものであり悪く言えば殺風景であった。呂布はその庭を横にして李儒と話をしていたのである。

「近頃太師は参内しておられぬな」

「新しい美女を宮殿に入れられたらしい」

李儒はそう呂布に語った。

「そうなのか」

「うむ。何でもな」

彼は貂蝉のことを知らなかった。当然その策のことも。だからここでつい言ってしまったのである。

「王充殿の義理の娘らしいぞ」

「何っ」

呂布はそれを聞き思わず声をあげた。

「李儒殿、それはまことか」

「うむ、わしも話に聞いたただけだがな」

驚く呂布に対して何かよくわからないまま答えた。

「そうらしいぞ」

「馬鹿な、そんな筈がない」

呂布は必死になってそれを否定する。

「王充殿は貂蝉をわしにくれると言ったのじゃ。それがどうして
「將軍」

李儒は彼があまりにも戸惑っているので怪訝になり問うた。

「どうしたのだ、急に」

「済まぬ、急用ができた」

しかし彼はそれに応えずに立ち上がった。そして述べる。

「これで失礼させてもらう。それでは」

「待たれよ、どうされたのだ」

しかし李儒の言葉は届かない。彼はそのまま馬を飛ばして王充の屋敷に向かった。その手にはあの画戟があつた。

「王充殿、おられるか」

彼は王充の屋敷に入るとその戟を手に叫んだ。

「出て来られよ、話がある」

「おお、これはこれは將軍」

王充はにこやかに彼の前に現われてきた。

「ようこそ来られました。御元気そうで何よりです」

「よくもわしをたばかったな」

呂布は挨拶も返さず王充を見下ろして言い放った。

「一体どういふつもりだ、貂蝉はわしの妻になるのではなかったのか」

「それでございますか」

「そうだ」

言いながら戟を前に突き出す。それを王充の喉に当てて言う。

「わかるな、わしがこれを持って来た意味が」

「一体何を」

「己の胸に聞くのだ。何故太師のところにいるのだ」

「申し訳ありません」

彼はそれを聞くと頭を垂れてきた。

「全て。仕方なかったのです」

「仕方ないと」

「はい。私も娘を將軍にお渡しするつもりでした。ですが宴に来られた太師が」

「そうであったのか」

「左様でございます。私も困っているのです」

涙を流して答える。この時彼は心から泣いていた。しかしそれは呂布とのことに対して流したものではない。娘を想つての涙なのだ。

「どうすればいいのか」

「何ということだ。それでは」

「はい」

王充は答える。

「私ではどうしようもなかったのです。返す言葉もありません」

「いや、いい」

呂布はさめざめと泣く彼を見て言う。その涙を簡単に見誤ってしまつたのだ。

第四章

「顔を上げられよ。王充殿程の方が泣かれてはなりません」

「有り難き御言葉」

「とにかく話はわかり申した」

彼は言う。

「後はそれがしでかたをつける。では」

そう言つて王充の前から姿を消した。王充は踵を返す彼を見てまた想うのであつた。

「これでよいのだな、貂蝉」

しかし彼女はここにはいない。彼は全てを投げ出して働く娘のことを想いまた涙を流した。それはもうどうしようもなかった。

呂布は董卓の宮殿に向かった。それは都長安から離れた場所にあつた。彼はそこに自慢の赤兔馬を飛ばして向かつたのである。

彼は宮殿に着くと出迎えの兵を無視しそのまま宮殿の中に入った。それに驚いた董卓の従者達が慌てて彼を呼び止める。

「將軍、お待ち下さい」

「ここからは」

「黙れ！」

しかし呂布は大きな声で彼等を一喝した。金や銀で細工されみらびやかというよりはゴテゴテした感じの落ち着かない宮殿の中に彼の声の木霊した。

「わしは太師の子であるぞ。何か用か」

「い、いえ」

「それは」

呂布の恐ろしさはよく知られている。彼等はその殺気立つ目を見て縮こまってしまい何も言えなくなつてしまつたのだ。

「ないであろう。ではな」

そのまま彼等を置いて奥へ向かう。暫くすると彼の前に彼女の姿が見えた。

「貂蝉」

呂布は彼の姿を認めて声をあげる。

「そこにいたのか、探したぞ」

「將軍……」

貂蝉もまた彼を見ていた。しかしすぐにその目に涙が滲んでいく。

「申し訳ありません、私は」

「いいのだ」

彼女の側に寄って抱き締める。そのうえで優しい声をかけた。

「そなたに罪はない。罪があるのだ」

「貂蝉、何処じゃ」

ここで宮殿の奥から董卓の声が聞こえてきた。

「何処におるのじゃ？」

そして彼の姿が見えた。彼もまた呂布を見ていた。その激しい視線がぶつかり合った。

「呂布、貴様」

董卓は貂蝉を抱く彼を見て怒りを込めた声をあげてきた。

「自分が今何をしているのかわかっておるのか」

「それはこちらの言葉です」

睨み付ける董卓に呂布も負けていない。きつとして睨み返す。

「貂蝉は私の妻になる女です」

「馬鹿を言えっ」

普段の董卓ではなかった。貂蝉を見る目はあの女をただのものとしか見ない傲岸不遜な董卓ではなかった。熱い目で彼女を見ていたのだ。

「貂蝉はわしのものじゃ」

「いえ」

二人は睨み合う。呂布も董卓も互いに引かない。

「御無体なことを仰られては困ります」

「引かぬというのか」

「左様です」

「ならば……よいのだな」

董卓は短気なことで知られている。しかもここは彼の宮殿の中だ。その彼が剣を抜くのは自然だった。しかし彼はここで大きな間違いを犯していた。

呂布は彼の養子である。宮殿の中への立ち入りも許されているし帯剣も認められている。彼は今は剣こそ抜いてはいないがその腰には剣があった。

いざという時はそれを抜くつもりであった。しかし今は貂蝉を抱いて董卓を睨み据えるだけであった。銀の火花が二人の間に散る。しかしそこで李儒がやって来た。彼は慌てて二人の間に入ってきた。

「待たれよ、待たれよ！」

そう叫んで間に入る。彼も娘婿であり董卓の腹心であったのでそれが幸いしたのだ。慌てて両者の中に入って互いを制止する。

「太師も將軍も落ち着かれよ」

「李儒か」

「はい。將軍」

董卓に応えた後で呂布に慌てて顔を向ける。

「今は下がられよ」

「しかし李儒殿」

「話は後で聞き申す。だから」

「わかった」

李儒の言葉を聞き入れた。貂蝉から離れ大人しく引き下がるのであった。

「待てっ」

「お待ち下さい」

董卓はまだ呂布を追おうとする。しかし李儒は彼の前に立ちはだかり通そうとはしない。小さな身体を必死に伸ばして董卓の巨体を

遮る。

「太師、ここは御自重を」

「何故わしがそのようなことをせねばならぬか」

「まずは落ち着いて下さい」

彼はそれでも言う。

「宜しいですね」

「……あくまでどかぬのだな」

「はい」

毅然として返す。その強い決意の目を見て董卓も立ち止まることにした。そのうえで大きく息を吐き出してから彼に声をかけた。

「済まぬな。鎮まった」

「ええ。それではですね」

申し訳なさそうに微笑む彼に対してさらに言う。

「お話を御聞きしましょう。どうされたのですか？」

「うむ。それじゃがな」

ここでちらりと貂蟬を見る。それから彼女に述べる。

「そなたは下がっておれ。よいな」

「畏まりました」

貂蟬はその言葉を受けて引き下がる。董卓はそれを見届けてから李儒に顔を戻して言うのであった。

「場所を変えるぞ。ここでは何じゃ」

「ええ。それでしたら」

李儒はそれに応える。彼等は場所を替え宮殿の隅に二人座って話をするのであった。

そこは董卓の部屋の一つであった。他のゴテゴテとした目立つ部屋に比べてこの部屋は質素で何も無い。まるで彼が生まれ育った北の大地のようである。そこで席につき李儒と向かい合って話をしたのであった。

牡丹

董卓は不機嫌な様子で呂布が貂蟬に抱きついていていたことを語る。あげくには処刑さえ言い出していた。

しかし李儒はそれを黙って聞いている。一通り聞いた後で口を開くのであった。

「よいではありませんか」

李儒は董卓にそう述べてきた。

「よいと申すか」

「太師」

彼は言う。

「確かに美女はいいものです。しかし私はより素晴らしい美女を一人知っております」

「それは誰じゃ？」

「天下です」

李儒は静かにこう述べてきた。

「天下か」

「そうです。太師の望みは何ですか？」

「天下に覇を唱えること」

その目に相応しい望みであった。彼は野心そのものであった。栄耀栄華も美女もそれへの添え物に過ぎない。彼は野心そのものといつていい男であったのだ。

「それがまず第一じゃ」

「左様ですな。ではあの美女は將軍にお渡しすればよいのです」

「貂蝉をか」

「何を今更」

李儒はそう董卓に返す。

「かつて將軍を養子にされた時のことを思い出して下さい」

かつて呂布は丁原の養子であった。丁原は董卓と敵対していたのだが養子である呂布が董卓に寝返り、彼により殺されている。この時董卓は彼に贈り物として愛馬赤兔馬と財宝を贈っているのである。

「そして今度は美女を。それだけです」

「それだけと申すか」

「その通りです」

彼は毅然として述べる。

「ですからこの度もです。將軍あつてこそです」

呂布の天下に轟く武勇。それこそが董卓の最大の切り札であつた。彼は呂布あつての権勢なのである。

「ですから」

「天下の為にか」

「そうです」

また述べる。

「御決断を」

「わかつた」

董卓は苦い顔をしながらもそれに答えた。

「ではそのようにしよう。それでいいのじゃな」

「はい」

李儒はすぐに頭を垂れてきた。

「その通りです。よくぞ決断して下さいました」

「では呂布に伝えよ」

彼は言う。

「貂蝉をやるとな」

「わかりました」

李儒はその言葉に勢いよく頭を垂れる。そうして宮殿を後にする。

彼はこの時あまりにも喜んでいたので気付かなかつた。部屋を覗き見る一人の女がいたことに。彼女はすぐに動いたのであつた。

董卓は李儒と別れた後で寝室に入っていた。ベッドの上でくつろいでいるとそこに貂蝉がやって来た。

「太師」

「おお貂蝉いいところに来た」

董卓は彼女に顔を向けて言う。

「実はのう、そなたを」

「私を」

彼が何を言うのかはわかっていた。ここは芝居に出ることにした。

第五章

あえて表情を隠す。それで続ける。

「呂布の妻にと考えておるのじゃ。どうじゃ？」

「それは」

その言葉を聞いて震えさせた。顔も青く見せる。

「どうしたのじゃ？」

「お許し下さい、それだけは」

「待て、どうしたのじゃ」

ベッドから身体を少し浮かせて問う。

「急に。顔がおかしいぞ」

「私は董卓様の僕です。それ以外の方には」

「待て、貂蝉」

董卓はその言葉にはっとなる。

「御前はわしのものだというのか」

「はい」

顔を隠しながらもこくりと頷く。その姿が実にいじらしく見えた。

「その通りでございます」

「そこまで申すのか」

「はい」

顔を俯けて礼をする。何気ない仕草だが今の貂蝉の言葉を聞いた董卓には何も言えぬ程の言葉であった。それだけで彼は全てを捨てるつもりになえなつた。

衝撃が走つたのだ。それまで暴虐なまでに好色であった彼が変わつた。今彼は他の何者よりも貂蝉を欲しいと思つたのである。

「わかつた」

彼は貂蝉の言葉に頷いてみせた。

「ではわしの下にずっといるのじゃ。御前はわしだけのものじゃ」

「本当ですか、太師」

「うむ」

董卓は貂蝉に顔を向けて満足そうに頷く。もう彼は後戻りできなくなっていた。

「よい。それでな」

「有り難うございます」

「そなたはわしだけのものじゃ」

そう言つて彼女を抱き寄せる。もうその顔は野獣のものでも霸王のものでもなかった。一人の女のことだけを考える一人の男になつてしまつていたのであつた。

このことはすぐに李儒にも伝わつた。彼はそれを自分の屋敷で聞いた。話を聞いた時彼は妻と食事中であつたが思わず箸を落としてしまつた。

「馬鹿な」

「よくあることではないのですか？」

妻が夫に問う。彼女が董卓の娘である。娘であるが父には似ていない。まだ少女の若さを残した美しい女であつた。李儒にとっては自慢の妻であつた。

「父上が女性を愛されるのは」

「そういう問題ではない」

「どういうことですか？」

夫の驚く理由がわからない。ついつい首を傾げさせてしまつていた。

「それは」

「よいか」

彼は真顔で妻に言つてきた。

「すぐに郷里へ戻れ。張繡殿のところだ」

董卓の部下の一人だ。彼の部下にしては中庸な人物であり人望もそれなりにある。李儒の親友でもあり彼は常に家族にはいざという時は彼を頼るように言つているのだ。その彼の名を出してきたのだ。

「いいな、すぐにだ」

「あの、あなた」

「明日だ」

妻に多くを言わせなかった。

「明日経つのだ、よいな」

「は、はあ」

夫の言葉に戸惑いながらも頷く。その中でも問う。

「では最後に父上にお話を」

「それには及ばぬ。太師にはわしから話をしておく」

それすらも許さない。李儒の顔は何時にも増して焦ったものであった。それにも増してその焦りを隠そうともしない。これは今まで彼にはないものであった。

「よいな。子供達を連れてだ」

「わかりました。ではあなたも」

「うむ」

しかし彼はそのつもりはなかった。未来がわかっていたからだ。それでも妻子だけは何とか逃したのであった。これは人としての情であった。

次の日の朝早く李儒の妻子は張繡のところへ向かった。彼はそれを見送った後で使用人達に家の残った金目のものを分け与え暇を与えた。広い屋敷に一人残り呟いた。

「終わりじゃ。何もかも」

廊下の真ん中で庭を見て頂垂れる。空は赤くなり落日が今沈もうとしていたのであった。もうそれを止めることは誰にもできそうになかった。

その話を聞いたのは王充も同じであった。彼はそれを聞いてふうと溜息をつくだけであった。

「いよいよじゃな」

彼もまた落日の中にいた。赤い光が彼のいる世界を染め上げてい

る。彼はその中で庭の牡丹の花を見た。

「白い牡丹が今は」

彼が見ている牡丹は今はもう赤くなっていた。落日が白い筈の牡丹を赤くしていたのであった。彼はそれを見て遂に全てが終わることを感じていた。

呂布はこの話を聞いた時胸が張り裂けんばかりであった。李儒から一旦は貂蝉の話を聞きそれが反故になったからだ。彼は李儒に詰め寄った。

「これはどういうことなのだ」

「そのままじゃ」

彼も無念の顔であった。呂布から目を逸らして答える。

「太師はあの娘を手放されぬ。それで」

「馬鹿を言え、わしは貂蝉を」

呂布は言う。その顔は何時になく激しいものであった。鬼にも例えられる彼が一人の女を想っていたのだ。それ以外は目に入らぬかのようにだ。

「なのに。何故だ」

「太師もそうであられるからだ」

李儒は血を吐くようにして呂布に述べた。

「だから」

「認めぬ」

しかし呂布はこう言う。

「認めぬぞ、そんなことは。どうしてだ」

「済まぬ」

「御主に謝られてもどうにもならぬ」

彼はそう返す。

「どうにもな。わしにとっては貂蝉は」

「何にも増しているのか」

「わしはそもそも天下なぞに興味はない」

思いも寄らぬ言葉であった。天下きつての猛将と謳われた男がで

ある。

「貂蝉、貂蝉だけが欲しいのだ」

そこまで思い詰めていた。もうそれは止まらなかつた。

「だからこそ」

「想いは変わらぬか」

「無理だ」

彼は吐き出した。

「何があってもな。それだけは」

「そうか」

李儒は何も言えなかつた。最早彼ではどうしようもなかつた。

「そうなのだな。その心は変わらぬか」

「わしとても変えたい」

呂布は言う。

「しかしどうしても変わらぬのだ。わしはもう貂蝉だけしか見えぬ」

「わかつた」

李儒はそこまで聞いて述べた。

「わしにはもう何も言えぬ。最早な」

「李儒殿」

「さらばだ」

彼は呂布に背を向けた。そのうえで歩み去っていく。

第六章

「將軍、將軍は後悔なさらぬな」

「無論だ」

彼はそれに答える。

「だからこそわしは今」

「そうだったな。ではもう」

どうしようもないのだと。あらためて思う。既にここまで至っては後は一つしか結末はない。李儒にはそれが見えていたのだ。そしてそれから逃げることもしなかった。

「何があつても後悔されるな。それだけだ」

「わかつた」

李儒の心はわからない。しかし頷いた。

「それではな」

李儒はそのまま呂布の前から姿を消した。誰もいなくなった自身の屋敷に戻るとそこに一つだけ置かれていた財産を使った。それを酒に入れて飲み干してから一人去つたのであつた。

呂布はもう止まらなかつた。次の日彼は董卓の宮殿に向かつたのであつた。

「なりません、將軍」

宮殿の入り口で彼は兵士達に前を塞がれた。

「太師は今ここにはおられません」

「ですから後でお願いします」

「貂蝉がおる！」

赤兎馬の上にいる呂布はこつ叫んできた。

「そうであるう！」

「それでもです！」

「まずは太師が帰られてから」

「黙れ！」

雷のような声で彼等を一喝する。

「貴様等にわしの何がわかるというのだ！」

そう叫んで兵士達を退ける。

「わかつておらぬのならどけ！」

「ですが！」

それでも彼等は踏み止まる。

「我々も責務があります！」

「ですから將軍！」

「どけと言っておる！」

そう言つて腕を振るう。剛勇無双の呂布である。兵士達は彼が腕を振つただけで吹き飛ばされてしまった。兵士達を吹き飛ばした呂布はそのまま先へ進んでいった。

「た、大変なことになったぞ」

兵士達の一人が起き上がつて言う。

「將軍が中に」

「太師に御報告を」

それでも彼等は己の責務を果たさんとする。董卓の下へ人を走らせる。だが呂布はもうそれを見てはいなかった。見ているのは彼女だけであつた。

「貂蝉！」

彼は宮殿の中を足早に動き回りながら彼女の名を呼んだ。

「何処じゃ、何処におる！」

実は彼女はもう彼が来たのをわかつていた。知つていて姿を隠していたのだ。呂布の姿を見ながら一人呟いていた。

「義父様、これで」

その手には短刀があつた。だがそれは呂布を殺す為でも董卓を殺す為でもなかつた。それは全てを終わらせる為であつた。彼女はそれを懐に忍ばせてから庭に向かつた。

宮殿の庭には池がありそのほとりに牡丹が咲いている。王充の屋

敷の牡丹は白ばかりであるがこの牡丹は赤しかない。呂布は今その牡丹が咲き誇る宮殿の庭に出て来たのであった。

「貂蝉！何処なのだ！」

貂蝉の名を呼んで歩き回る。するとそこに彼女が立っていた。

「貂蝉、ここにおったか」

「將軍、どうしてこちらへ」

「そなたを連れに参った」

呂布はにこりと笑って彼女に述べてきた。

「ここにな」

「ですが私は」

貂蝉は彼の言葉にも笑みにも顔を背けて言った。

「もう太師の」

「太師のことは最早いい」

だが呂布はここで彼女にこう述べた。

「わしはもうそなただけしかいらぬ」

「私だけが」

「そうじゃ」

彼はまた言う。

「だからここを出よう」

「二人きりですか」

「左様、二人でな」

貂蝉を見詰めている。見詰めるその目の中には彼女しか映ってはいなかった。

だから彼は気付かなかった。彼女の目に彼は映っていなかったことに。そのことに気付かない程一途に彼女のことを想ってしまったのだ。

「では行くぞ」

呂布は貂蝉の華奢な両肩に己の大きな手を置いて声をかけてきた。

「二人で」

「何処へ」

「そこまではわからぬ」

すつと笑つて述べた。彫の深い顔に穏やかな笑みが浮かんでいた。

「しかし。わしにはそなたがいてそなたにはわしがいる。だから」

「平気だと」

「どの様な者が来てもわしには勝てぬ」

彼は断言した。

「心配は無用じゃ」

「太師が追つて来られても」

「構わぬ。わしがおる」

「左様ですか」

「じゃから。行くぞ」

そのまま彼女を連れて出ようとする。ところが。

「むっ!？」

それは小戟であつた。手に持つて投げるものである。

寸分違わず呂布の眉間を狙つていた。しかしその程度のもは彼にとつては造作もないことであつた。瞬き一つせずその小戟を右手ではたき落とす。戟は枯れた音を立てて庭に転がった。

「誰だ」

「言つまでもなかつた」

太い男の声がした。董卓が二人の前に姿を現わしてきた。その顔は憤怒の相になり目からは火が出るようであつた。その顔と目で呂布を見据えていた。

「離れよ。二度は言わぬ」

「それはこちらの言葉だ」

呂布はそう董卓に返す。

「太師匠」

そのうえで彼を呼ぶ。

「貂蝉を私に譲つて下さるのではなかつたのですか」

「貂蝉はわしのものだ」

それが彼の返事であつた。

「それ以外の何者でもない」

「左様ですか。それは私も同じこと」

貂蟬の身体を横に置き両手をその肩に添えながら述べる。

「私もまた貂蟬を」

「他のものなら何でもやる」

董卓は少しずつ二人に近寄りながら述べる。その腰には剣がある。

「天下ですらな」

「天下は貴方のものです」

呂布は彼に言った。

「そうではなかったのですか？」

「ふん」

しかし董卓はここでそれを否定してきた。

「天下か。下らぬな」

「何と」

「確かに今までのわしは天下を追い求めていた」

驚く呂布にそう告げる。

「しかし。最早そんなものはどうでもよいのだ」

「どうでもよいと仰るのか」

「天下になそ何の価値がある」

彼は言う。

「一人の女に比べればな。何の価値もないものじゃ」

「天下を捨てられるというのか、貴方は」

「そうじゃ、貂蟬の前にな」

彼もまた呂布と同じ考えになっていたのだ。それをはっきりと言ってきた。

「栄耀栄華も財宝も。戦いの後の美酒でさえも」

董卓は戦場で生きてきた男だ。戦場で戦い、戦場で笑ってきた。

戦塵と叫び声こそが彼の家であり勝ち鬨と勝利の美酒こそが最高の馳走であった。それが董卓という男であった。しかし今彼はそれを、他ならぬ彼自身を否定してきたのだ。自らの全てをである。

「そんなものはもう要らぬ。わしは貂蝉だけが全てなのだ」
「それはならぬ」

だが呂布も引き下がらない。

「貂蝉はわし以外の誰にも渡しはせぬ、何があるうともだ」
「何があるうともか」

董卓は彼の言葉に問う。

第七章

「そして誰であつてもか」

「その通りだ」

呂布の言葉には一切の迷いが無い。

「貴方であつてもだ」

「そうか。ではこれ以上は話しても無駄だな」

董卓は遂に言つてきた。

「そなたは。下がらぬか」

「貴方もまた」

「ならば。覚悟せよ」

董卓は腰の剣を抜いてきた。白銀の瞬きが彼の前で煌めいた。

「苦しませはせぬ。よいな」

「それはこちらと同じこと」

呂布もまた。腰にある剣を抜いてきた。

「下がりませぬな」

「御前と同じこと」

董卓はまた告げた。

「それでわかるであろう」

「確かに。それでは」

二人は剣を構える。二人共微塵の隙もない構えであった。

「お見事です」

呂布は董卓のその構えを見て述べた。

「それだけの構えは。そうは見ませぬ」

「誰だと思つておる」

董卓は轟然として彼に言つてきた。

「かつては北で名を馳せたこの董卓、衰えてはおらんぞ」

「それでは参りますか」

「無論」

その言葉にも迷いが無い。

「よいな」

「ええ」

二人は左右に動く。動きながらお互いの隙を探る。貂蟬はその間に二人から離れた。一人何処かへと去ったのであった。

しかし二人はそのことに気付かない。そのまま剣で斬り合う。董卓はその肥満した身体からは想像もできないすばい動きで剣を振る。呂布ですらそれは受け止めるのがやっとであった。

「くっ、これは」

「呂布、その程度か」

董卓は剣を繰り出しながら彼に言う。突きをメインに呂布を襲う。

「その程度で天下に武勇を知られたというのか」

「くっ」

呂布はそれを受けながらも退きはしない。董卓は今まで多くの戦場で敵を倒してきている。だからこそその剣は鋭く速い。しかし呂布もまたそれは同じだ。彼は攻撃を受けながら隙を窺っていた。

だがそれも限界に近づいていた。すぐ後ろに池がある。池に落ちてそのまま沈めて倒すことも可能であるからだ。状況は董卓に有利になるうとしていた。

「覚悟はいいな」

董卓は呂布に問う。

「このまま」

止めをさそうとこれまでにない一撃を繰り出してきた。しかしここで気合を入れ過ぎてしまった。僅かだがバランスを崩した。それは並の者ならば気付かないものであった。しかし呂布は違っていた。その一撃にある崩れを見ていた。彼はそれに入ってきた。

「もらった！」

呂布は董卓の突きを避けた。危うく彼が池に落ちそうになるがそこで態勢を整える。そのまま右に振り向きざまに剣を振ろうとするが遅かった。そこにはもう呂布がいた。彼は剣を横に一閃させた。

それで董卓の胸を斬った。

「ぐっ」

返す刀で縦に斬る。二条の血泉が噴き上がる。これで全てが決まった。

董卓は剣を落とした。乾いた音が鳴る。それから背中から倒れた。重く鈍い音が響く。彼は血の中に倒れ込んだ。

「これで貂蝉はわしのものだ」

呂布は倒れ伏した董卓を見下ろして言った。

「それで宜しいですな」

「御前は勝った」

董卓も言う。敗れたとはいってもまだ覇気をその身にまとわせていた。

「それだけだ」

「はい。ですから貂蝉を」

「うむ」

董卓は頷く。

「それでは」

「しかし不思議なものだ」

董卓はあらためて述べた。

「天下よりもな。欲しいものがあるとは」

「それが貂蝉だと」

「同じじゃ」

彼は言う。

「御前とわしはな。同じだったのじゃ」

「ええ、確かに」

それは呂布もわかる。だからこそ二人は争ったのだ。

「だから。覚えておけ」

そう呂布に述べてきた。死期が今そこに迫ってきているというのにその顔は赤くまるで鬼のようである。とても今死ぬとは思えない。「わしと同じ破滅にならぬようにな」

「それでも構いません」

呂布はそれに応えて述べた。

「私は貂蝉さえいればいい。だから」

「そうか。そうじゃな」

その言葉に微笑んでみせた。

「では己の道突き進むがいい。よいな」

最後にそう述べて言葉を止めた。董卓はそうして最後まで董卓として死んだのであった。

呂布はそんな彼に対して一礼する。まだ礼は失ってはいなかった。

「後は……貂蝉」

彼女のことを思い出した。周りを見回したがそこに彼女はいなかった。

「何処だ、何処にいる」

咄嗟に辺りを見回す。しかし見当たらない。

辺りを歩いて回ることにした。すると庭の外れ、牡丹の花の側に彼女はいた。その手に短刀を持って倒れ込んでいた。

「馬鹿な、何故だ」

呂布は彼女の姿を見て叫んだ。喉から血を流して死んでいたのだ。

「これからわしは御前と」

貂蝉に駆け寄る。そして抱き寄せる。

「何故だ、それなのに何故」

返事はない。何も語りはしない。

「どうしてなのじゃ、それなのに御前は」

だが貂蝉は一言も語りはしない。しかしその口元は微かに笑っていた。

その微笑みが何故であるのか呂布は見てもわからなかっただろう。その前に彼はその微笑みに気付いていなかった。彼は貂蝉を抱いて涙を流していた。そのまま何時までも彼女を抱いていたのであった。

董卓を倒した呂布はその後流転の人生を送った。戦乱と裏切りを

繰り返し最後は徐州での戦いで曹操猛徳に捕まった。その時は冬だった。雪が世界を覆っていた。

「ふん」

彼は縛り首になることになった。後ろ手で縛られ今城内の刑場へ引き立てられていた。彼は鎧のまま連れられ慄然とした顔で歩いていた。刑場も雪で白く染められている。既に何人かの処刑が終わっている。彼等は皆城門に吊るされている。呂布の番というわけだった。

「呂布よ」

絞首台の前には曹操が配下の武将達と共にいる。鋭利な顔をしており紅の鎧と戦袍を身にまとっている。その彼が呂布に声をかけた。

「これが最後だな」

「わしを生かすつもりはないのだな」

「残念だな」

曹操はこう返してきた。傲然とした目で呂布を見上げている。呂布の身体は後ろ手で縛られているがそれでも大きさは変わらない。だからこそ彼を見上げているのであった。

「御前は配下にはできん。裏切られては困る」

「裏切りか」

「左様」

曹操は答える。

「わしは自分の下に虎を置くつもりはない。だからじゃ」

「虎か」

「豹でもよいぞ」

彼は言ってきた。

「どちらにしろ何時心変わりするかわからぬ獣。そんなものを買うつもりはない」

「心変わりか」

呂布はその言葉に眉をピクリと動かしてきた。その濃く猛々しい

眉を。

「確かにわしは多くの者を裏切ってきた」

「自分でわかつておるな」

「二人の義父もな。この手で殺めた」

丁原に董卓のことである。このことが彼の悪名を決定的なものにしたのだ。その為に彼は信用されてこなかったのである。

「そして」

曹操の隣にいる大きな耳の男に顔を向けてきた。劉備玄德である。一応は皇族ということであり呂布は彼のところに身を寄せていたこともあるし裏切ったこともある。浅からぬ因縁のある相手であった。貴殿にもな」

劉備は何も語らない。ただ呂布を見ているだけであった。

「しかしだ」

それでも彼は言う。

「ただ一つだけ裏切らなかったものがある」

「ほう」

曹操はその言葉を聞いて声をあげてきた。

「面白い。それは何だ」

「花だ」

それが彼の言葉だった。

「わしが裏切らなかつたただ一つのはな」

「花を裏切らなかつたというのか」

「そうじゃ」

また曹操に答える。

「それだけはな」

「では聞こう」

曹操はそれを聞いて呂布に問うてきた。興味深げに彼を見ていた。

「その花は何の花じゃ」

「牡丹」

彼は一言で答えた。

「牡丹の花じゃ。それだけはな」

「裏切らなかつたと申すか」

「そうじゃ。だからわしは」

上を見上げた。空を見ている。その空は灰色の厚い雲に覆われている。だが彼はその雲を見てはいなかった。

「牡丹を持つて死にたい」

「そうか、牡丹をか」

「それでよいか」

「春の花なのでないが。しかしじゃ」

曹操は言う。

「赤い布で作らせる。それでよいな」

「赤い牡丹をか。ならばそれでよい」

曹操の言葉を受けることにした。こくりと頷く。

「それでな」

「わかった。ではな」

「うむ」

呂布はその作られた赤い牡丹を服に入れられて処刑された。その顔は不思議と穏やかで満ち足りたものだったという。それから牡丹は中国では貂蟬を現わす花になった。そこにはこうした悲しい話があったのであった。

牡丹 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5964c/>

牡丹

2009年3月24日11時01分発行